

〔光る話〕の花束
‘Bright Tales’
Anthology

夢探偵

筒井康隆 編

夢探偵

筒井康隆 編

光文社

お願い

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえていただければ、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二一二―二三

(郵便番号112-11)

光文社 出版局

夢探偵 『光る話』の花束1

一九八九年六月三〇日 初版第一刷発行

編者 筒井康隆

発行者 大坪昌夫

発行所 株式会社光文社

東京都文京区音羽二一二―二三
電話 東京(〇三)九四二―二二四一(代)
振替 東京六一―一五三四七

印刷所 大日本印刷

製本所 大日本印刷

定価二、三〇〇円
(本体一、二六〇円)

夢探偵——目次

オープニング

お爺さんの玩具

音楽論

夢、覚え書

願望

阿波環状線の夢

夢

夢飛行

法子と雲界

鞆の中身

筒井康隆 7

内田百閒 9

清岡卓行 13

武田百合子 19

星新一 25

安部公房 35

澁澤龍彦 41

小泉八雲 47

筒井康隆 53

吉行淳之介 79

孤島夢

夢の殺人

夢三態

夢の底から来た男

雀

私の夢日記

夢日記

付録 夢の検閲官

筆者紹介・収録作品出典一覧

島尾敏雄

91

石川 淳

101

八木義徳

125

半村 良

151

色川武大

225

横尾忠則

245

正木ひろし

259

筒井康隆作・解説

295

夢探偵

筒井康隆編

装 装
画 丁
荒 スタ
井 ジ
良 オ
二 ギ
ブ

オーブニング

現実とは夢化され、夢は現化される。夢とは現実の聖化であり、美的理想化であり、抽象化であり、虚構化である。つまり「物語化」なのである。これによって現実とは改造され、新しい夢に奉仕する。

近代人が近代的理念を「夢」と呼んだ理由はここにある。また文学が夢を重視しなければならなくなった理由もここにある。近代からの超克を成し遂げるのはポスト構造主義などではない。実は夢なのだ。

なあんて難しいこと言っちゃって。読者諸君は何もそんなこと考えなくたっていいんですよ。享樂的にこのアンソロジーを楽しんでください。以上のたわごととはあくまで編者がこの一冊を編もうとした時に確認した、夢に対する現在の認識に過ぎません。

とはいふものの、おれが読者に、夢に対して自分と同様の認識を持つてほしいこともまた、確かなことなのだ。なんとかして現代社会での夢の重要性をわかってもらえたらなあ。そうなれば宗教がくたばり果てた現代、それに取って

かわるものとして夢しかないこともまたわかって貰えると思うのだ。なるべく楽に、すうっと、さりげなく引きずり込むことにしようか。

そのためには、最初から順を追って読んでいただくことが望ましい。各篇に解説がついているが、作品はなるべく読みやすく、わかりやすく、そして解説しやすいものから順に配列しており、解説も論理的展開を追っている。

最後に付録としてわが作品「夢の検閲官」をテキストとして、フロイトの夢理論を紹介している。途中で常識的な夢理論を知っておきたくなられたかは、これを先にお読みになられてもよろしいかと思う。

ではさっそく、ドリーム・ランドの正面入口からどうぞ。

筒井康隆

●お爺さんの玩具・内田百閒

日常の慌しさの中で、ひとは自分の原点を忘れている。原点に戻れるのが、些事から解放されて老齡に達した時というのは悲しいことだ。しかも夢の助けを得なくてはならないとは。

ふだん忘れていたことを夢が思い出させてくれることがある。なんでこんな夢を、と、たいていのひとは不思議に思うだけで、すぐ忘れてしまう。こんな勿体ない話はないのだ。それは今のあなたにとってたいへん重要なことなのだ。それどころか、もしかすると今あなたが解決に困っている問題の解答なのかもしれない。

と、ユング氏は言っています。

獨樂は、お爺さんにとっての「ばらのつぼみ」だったのです。

お爺さんの玩具

内田百閒

お爺さんは日向ぼっこをすると、いつでも居眠りをしました。

すると、きまつて夢を見ました。お爺さんのうしろに、大きな銀杏の樹があつて、その根もとところを一人の子供が、一生懸命に掘つてをりました。

あくる日もお天氣がいいと、お爺さんは、おんなじ場所で日向ぼっこをしました。すると間もなく眠くなつて、居眠りを始めるのです。さうして、又おんなじやうな夢を見ました。

いつも、いつも、始めの方はおんなじ夢でした。しかし何度も見えてゐるうちに、子供の掘る穴が段段深くなつて、しまひには、その中から、いろいろの玩具おもちゃが出て來ました。

お爺さんは、その玩具に見覚えがあるやうな氣がして、夢の中で一生懸命に眺めてをりました。そのうちに、やつと解りました。それはもう何十年も昔のお爺さんの子供の時の、玩具でした。

お爺さんは、目がさめてから、その事を思ひ出して、不思議で堪りませんでした。

ある日、お爺さんが、いつもの通りに日向ぼっこをして、それから居眠りをしますと、いきなり耳許で、「お爺さん、お爺さん」と云ふ聲がきこえて、目がさめました。その時も矢つ

張りいつもの夢を見て、丁度子供が穴の中から、何だか取り出さうとしてゐるところでした。そこで目がさめたのでした。

お爺さんは、急に思ひついて、お庭の奥にある銀杏の樹の下を掘つて見ました。すると中から、古い、よごれた獨樂が一つ出て來ました。それは本當にお爺さんの昔の玩具だつたのです。

夢の中で、いつも銀杏の樹の根もとを掘つてゐた子供は、お爺さんの子供の時の姿なのでありました。

さうして、さつき「お爺さん、お爺さん」と呼んだのは、お爺さんの孫の聲でありました。

●音楽論・清岡卓行

ひと前で何かやって大受けに受けたという願いは、極めて内気なひとにもあるようだ。いや。内気であればあるほど、一度カラオケで歌って大受けに受けたとなると、その気分を何度も味わいたくてしかたがない、といった現象にはしばしばお眼にかかる。歌のへたなひとが、大観衆の前でオペラ、カンツォーネの類を朗朗と歌っている夢を見るのもこのせいであらう。

清岡さんはふだん教壇に立っているので、人前に立ちたいという願望はさほどないようだが、固苦しいフランス語文法の説明ばかりの授業を物足りなく思い、突拍子もない理論を自由に駆使したいと思っておられることはほぼ間違いないところだろう。そこでこんな夢になってしまふ。さすがに文学者。ナマに文学論は出てこないで、「音楽論」と、夢までが洒落ている。周囲の風景の変化も、教室からの離脱の願望であるらしい。

音楽論

清岡卓行

私はある大学で、フランス語の初歩を教えているしがない教師である。授業において、文学論めいたおしゃべりは、ほとんど口にしない。自分にそれを禁じている、ということもある。固苦しい文法の説明を主にして、フランス語を日本語に直して行くだけである。それがどうしたわけなのだろう、今日は五十人ほどの学生を相手に、短篇小説のテキストをそちのけにして、素人の音楽論をぶっている。それも、まことに奇妙な構造分析の音楽論だ。もしかしたら、こいつ気狂いではないか、と思われるのではないか？

とにかく、比喩がいけない。ベートーヴェンの傑作には、ほとんど例外なく、どこかにエジャキュレーション（註）があると言っているのである。ほかに、もつとまじな比喩はないのだろうか？ おまけに、それだからこそ、ベートーヴェンの音楽の中に深くのめりこむと、自分が世界中で一番よく彼の音楽を理解しているではないか、と妄想しはじめるようになる、と言っているのである。それは、比喩で煙幕をはったところの、論理の馬鹿げた飛躍ではないのだろうか？

大学生五十人ほどの、三分の二ぐらいが男で、三分の一ぐらいが女である。私はもう十数年に